



◀「京都つづら坂」山科屋(YZME115011/9月19日発売)。たきのえいじプロデュースによる、女性20人の演歌ヴォーカル・ユニット。京都の有名な坂を舞台にした叙情演歌だ。



福岡を拠点に活動している「博多屋・本店」に続いて、京都から、同じく演歌ヴォーカル・ユニット「山科屋」(20名)のCD『京都つづら坂』が9月19日、クラウン徳間販売株から発売される。

この企画は、私が密かに10年近く前から温めていたものの一つ。更

に、10月17日には「YOKOHAMA A屋」(23名)というユニットが、演歌ではなくバラード調の『女達のバラード』を発売予定で、現在レコーディングの最中である。

という訳で、山科屋。チームに参加して頂いた方々とは、博多屋・本店同様、私とは長いお付き合いで、各自の歌心や声質、歌唱力の程を私は認知していて、その上でのチーム作りである。

「みんなの、みんなの為の、みんなの演歌」を掲げて、およそ2年。こうしてグループ第2弾として「山科屋」をスタートさせる事が出来た。この動きが、歌のヒットもさることながら、社会現象になるまでには、まだまだ時間がかかると思うけど、歌謡界に革新を！と願い、励んでいる。と共に、人と人との声の絆。これを重ねて私は形作りたいたのである。

俳句や小説や、映画作りと違って、歌は心の底から唄うことが好きならば、それなりに各自完成させることもできる。仲間もすぐ出来る。その近づき易さが、また歌なればこそ、である。

世代に応じて好みはあろう。その好みがあるからこそ楽しくて面白い。例えば、20代の人々が『東京音頭』をこよなく好きで結構なのである。

私の様に、毎日、朝にはパツハヤモーツアルトや、ステイキングやエリック・クラプトンを聴き、演歌系の歌を書いたつてなんの問題もない。その集合体が未来である。その未来を1日でも長く生きる為、そして描いた夢を1日でも早く実現する為、私は私の毎日を生きている。

そんな訳で、6月18日、私は山科屋のデビュー曲レコーディングの為、大阪のスタジオにいた。朝11時からの録音の為、前日、大阪に入り準備。メンバー全員と大阪は梅田阪急で合流し、スタジオに向かう。この1日、新幹線の最終まで、私は一人、歌人れと格闘する。メンバーは20人。数人毎のグループに分けて録音し、全て録り終えて、再び1本にまとめてゆく。つまりトラックダウン。この作業も私は40年近く

自宅でも多重録音しているので、一人で充分やれる。勿論、エンジニアが一人必要であるが。

『京都つづら坂』。私の好きな京都の坂から3つを選んで歌にした。録音したばかりの歌を抱えて、最終ののぞみに乗る。1日中、座っていた体は重く、腰を動かすと関節が痛い。くたくたになった体ではあるが、耳にヘッドホン差し込む。そんな時、ふと、自分の怖いくらいの歌への執念を感じる。先程まで、数百回聴いた歌なのだ。それでも、また聴いている私。

執念。つまり愛である。愛そのものである。そして、ただひたすら、私は私の作る歌が好きなのだ。



たきのえいじ

本名・滝野英治

1949年8月31日、愛媛県大州市生まれ。作詩・作曲の両分野で活躍中。演歌歌謡曲にあつては主に作詞家としての活動が目立ち、伍代夏子、田川寿美、石原詢子他に数多くの作品を提供している。